

学者と災害 台湾小林平埔原住民族文化重建協会の試み

林清財 りん せいざい (リム チンツァイ) / 国立台東大学 (台湾)

編訳:

三尾裕子 みお ゆうこ / AA研

陳麗君 ちん れいくん (タン レイクン) / 国立成功大学 (台湾)
AA研外国人研究員

台湾 (中華民国)



一昨年の台湾での水害からの復興の道程は、インフラの整備だけではなく、親密な人間関係に基づく地域の社会・文化の維持・発展の重要性を私たちに教えてくれている。台湾の先例は、東日本大震災からの復興にも示唆を与えてくれそうだ。(三尾裕子)



写真1 緑満ち溢れる小林村の遠景 (2004年12月19日、簡文敏撮影)。



父の日の悪夢

2009年8月8日の父の日、モーラコット台風*¹があの美しい小林村^{シヨナー}を土石流で呑み込んでしまい (写真1、2)、全村で僅か40余人が救助されたというニュースが伝えられた*²。

小林村は、高雄市で数少ないシラヤ族タブロン社群の人々による毎年1度行われる夜祭を継承してきた村である。これまで僅かに残されてきたシラヤ文化の消失を心配した筆者や仲間の学者たちは、災害後、8月16日に記者会見を開いた。会見では、政府の救援、復興に対する無策、妥当性のない水利政策などに批判が集中した。また「小林村自救会 (以下、自救会)」会長の指揮の下、命からがら逃げ出した村民も涙ながらに故郷を還して欲しいと叫んだ。記者会見には数百人が参加したが、残念ながら、政府関係者は現れなかった。

記者会見当日の午後、私たちは集まって「小林平埔原住民族文化重建協会 (小林平埔先住民族文化復興協会、以下「協会」とする)」*³を立ちあげた。そして、自救会の同意を得ながら、小林の文化復興に関する事業を積極的に支援して行くことを決定した。

小林村消滅の危機

小林村は、歴史的由緒のある村で、小林、五里埔、南光、錦地、埔尾の小集落からなっ

ていた。小林は其中でも最も人口が集中する。集落の両端の土地公廟*⁴が集落の境界となり、中心には、村全体で崇拝する神を祀る「北極殿」と呼ばれる廟があった。家屋は、大部分が皆空間配置や並び方が均一で、どの家の前にも広い前庭が作られていた。川沿いには現代建築技術によって建てられた平埔文化園区*⁵、公廨*⁶ (写真3)、その前に広場とシラヤ劇場 (舞台)、親水公園や児童遊戯施設、駐車場などが揃っており、コミュニティ作りと平埔文化の再生運動とが結びついていた。更に、村には清朝時に行われた山地討伐によって異郷で死亡した兵士を祀る石の塚、日本時代に建てられた派出所などあり、異なる時代の国家権力による支配の痕跡が残されていた。それらの上に村人たちが作りあげた建築が加わり、多彩で多層的な記憶が実体化されていた。言い換えれば、彼らの記憶は、様々なモノを通して存在していたばかりではなく、更に、その背後に民族間の相互行為、文化変化などが隠されていた。しかし、今回の災害によって、人や風景は瞬く間に消え去り、多くの人が悲しみのどん底に突き落とされたのである。

災害救助作業は、まるでもう一つの大きな災難のようであった。救援物資をどこに配分するかで毎日紛糾し、台風通過後も大雨が続

き、道路は寸断され、橋も落ち、修復した道路がまた雨で通れなくなった。協会員は台湾各地で仕事をもっていたので、政府に対して何かを要求する際に集まる以外は、電話で連絡を取り合うのがせいぜいだった。この他、様々な宗教団体が初七日だの四十九日だのと法事をしに入ってきたばかりか、政府の官僚や、記者、ボランティア、NGO団体、学者などがひっきりなしにやってきて、やれ救助だ、調査だ、研究だといったは被災者に再三にわたって被災時の状況を無理やり話させるなど、まるで被災者を拷問刑にかけているようだった。

村落の再建

被災72日目、臨時の公廨が小林村の五里埔に建てられた (写真4)。83日目 (10月29日) には、協会が被災者、政府関係者、学者を集め、「南台湾平埔族文化再建シンポジウム」を開催した。政府からも高官ではないものの代表者が参加するなど、被災地への関心は低くなかった。会議では平埔文化の保護や復興、救災、法律の整備、災害の責任追及などに関して学者から批判や建言がなされた。特に、被災者の避難救助や村の再建において、政府と被災者との間に存在する不均衡な関係が指摘された。この不均衡な関係は、政

写真2 被災後、小林村は河川敷きになってしまった(2009年8月16日、林清財撮影)。



写真3 公廨の前での太祖の聖誕祭の祈り(2004年旧暦9月15日)。

写真4 五里埔に建築中の臨時公廨(2009年10月)。



写真5 五里埔に建てられた臨時公廨で行われた太祖夜祭(2010年10月22日)。



写真6 小林村の儀礼の再興の参考とされた浅井恵倫教授撮影の写真。

府が制定した「モーラコット台風災害復興特別条例」の随所に見ることができた。即ち政府は、一方では、災害救助を優先し、国民の立場に立って、文化の多様性^{*7}を尊重して復興事業を行うと述べたが、他方では、国土や環境資源の保全に関わる問題の解決が、住民の生活方や文化、コミュニティの保護に優先するとしたのである。

被災者と政府の非対等な関係の中で、被災者の願い、NGOおよび政府の処理法はそれぞれ焦点が異なっていた。間に立った協会ができたのは、正確な情報を提供し、正義に照らして合理的な要求を提出するように弱者である被災者を励ますことだけであった。このような活動では、理念と実際の不一致から、異論が噴出し組織が分裂しがちであるが、小林では、親族及び婚姻関係の結束力が強く、相互協力を重んじる社会的特質があったため、集落の再建は楽観的かつ積極的に進められた。

青年たちは文化の創造に積極的であった。「焼狼煙(大きい狼煙を上げる)」という先祖の霊に知らせる形式をとる儀礼を行って、政府の不合理な政策に対して抗議を行った。また、「慈済大愛園區」^{*8}に居住するシラヤの人々を集め、伝統手芸や歌舞を互いに学ぶ活動も新たに行っている。これらの活動は人々の心を動かし、政府の政策にも影響を与え

た。結局、小林村だけは他の五つの被災先住民族とは異なり、他の民族と混住する必要のない独立した再定住地(小林一村、小林二村)を得ることが政府から認められた。

文化の復興へ向けて

被災者が赤十字の仮設住宅に移って一年余りがたって、2011年1月、五里埔に小林一村の90軒が建ち、公廨・廟寺・広場ができ、小林博物館も着工した。小林二村もまもなく高雄市杉林区に建てられる。小林二村は小林村から40キロ離れているが、小林村の前線基地として、新しい文化を構築しつつ小林一村の伝統文化とともに輝いていこう。協会は小林村のために、調査研究を三つ行うことになった。そのうちの一つは「シラヤ族のタブロン社群伝統文化調査および口述歴史と映像記録計画」である。政府の先住民行政を行う部門は、この地域の先住民を支援する組織を設立し、文化行政を行う部門も、民族文化の調査と映像記録を行う事業を協会に委託した。

協会は2010年10月、小林再建のための二回目のシンポジウム「南台湾平埔族群文化学術シンポジウム」を行い、更に、「夜祭」(写真5)に協力した。「夜祭」の祭儀歌謡は、1930年代に浅井恵倫教授が採集した録音を

引用した。東京外国語大学AA研が保管する浅井教授の録音及び調査ノートが、小林村の村民が祭典の奥義を再構築する際の根拠となったのである(写真6)。2010年の夜祭も台風の中で行われたため、遠隔地に住む平埔族の親族は参加できなかった。それでも小林村民は「来年小林一村が落成した後の、次の夜祭では、皆を誘って祝おうではないか!」と期待に胸をふくらませている。

[注]

- *1 台湾南部を襲った台風。コンクリートの建物が丸ごと倒壊したニュース映像をご記憶の方も多だろう。
- *2 数百名が生き埋めなど行方不明になったという。
- *3 平埔とは、台湾の先住民のうち、漢化の早かった民族の総称、シラヤはその中の一族である。なお、台湾では、先住民は、原住民と称されている。
- *4 土地神を祀る施設。
- *5 野外の文化展示スペース。
- *6 シラヤの始祖である太祖を祀る施設。
- *7 被災地は、先住民地域であり、異なった文化や伝統をもつ複数の先住民族が被災した。
- *8 「慈済」は仏教系団体。宗教活動以外に、慈善活動、教育などにも力を入れている。モーラコット台風の被災者に対して、「大愛園區」と名付けた土地に新しい家を提供した。ただし、様々な先住民族を混住させ、被災者に彼等の従来の風俗習慣とは異なる、慈済の理念に基づく生活様式に慣れるように求めている。